

# 現代日本語共通語のコピュラ・終助詞の韻律と発話構造

## The Structurally Determined Accent of Copulas and Particles in Modern Common Japanese speech

定延 利之<sup>†</sup>

Toshiyuki Sadanobu

<sup>†</sup>神戸大学

Kobe University

sadanobu@kobe-u.ac.jp

### Abstract

It has traditionally been thought that the Modern Common Japanese accent is lexically determined (e.g. Beckman and Pierrehumbert 1986). Contrary to this common view, I showed that this does not necessarily hold depending on speaking modes, by pointing out that all the letters are pronounced with an initial high accent when the speaker is not thinking about the meaning of each individual character (Sadanobu 2015). This paper further claims that there are cases of lexical indeterminacy of accent. More specifically, it shows that the accent of some copulas and particles are not determined lexically, but sometimes depend on their positions within speech structure.

**Keywords** — Accent, Lexical Determinacy, Japanese, Copula

### 1. はじめに

現代日本語共通語では、アクセントはその語ごとに決まっていると伝統的に考えられてきた。これに対して筆者は、話し手が1文字ずつ意味を考えずに発話する場合（以下「文字モードの発話の場合」と記す）は全ての文字は決まって頭高型アクセントになることを指摘して、この通説が発話モード次第では不当になることを示した（文献[1]）。本発表はアクセントが語ごとに決定されていない場合がさらにあることを主張する。感動詞・コピュラ・格助詞・終助詞のアクセントが語ごとには決まらず、発話構造における位置によって決まる場合があるということを示す。

### 2. 文字モードの頭高型アクセント

拙稿（文献[1]）で述べたのは、「アクセントが語彙ごとに決まっている」という現代日本語共通語の語の性質(lexical determinacy, 文献[2])は、発話モードによっては（つまり発話の単位次第では）成り立たないことがあるということである。具体的に言えば、話し手がことばを1文字ずつ、意味を意識せずに発話する「文字モード」の場合、全ての文字は頭高型アクセント（第1モーラにアクセント核があり、第1モーラだけが高

いアクセント）で発せられる。アクセント核（そこまでは高く、直後から低くなる部分）の位置をアポストロフ「'」で示しながら、例を(1)~(5)に挙げる。（以下でもアクセントが問題になる箇所では同様にアクセント核の位置を記す。）

- (1) A (え' え) B (び' い) C (し' い)  
D (でい' い) …… V (ぶ' い) W (だ' ぶりゅう) X (え' っくす) Y (わ' い)  
Z (ぜ' っと)
- (2) 認 (に' ん) 知 (ち') 科 (か') 学 (が' く)
- (3)a. 田中さん (たなかさん) 柴田さん (し' ばたさん)
- b. 夏さん (か' さん) 朱さん (しゅ' さん)  
徐 (じょ' さん) 曹さん (そ' うさん) 張さん (ちよ' うさん) 孟さん (も' うさん)
- (4) 「定 (さ' だ)」という字はこう書きます。
- (5) 「し' く」と読む字なんて、ないね。

例(1)はアルファベットであり、これらは全て頭高型アクセントで発せられる。例(2)は「認知科学」という意味ある合成語としてなら「にんちか' がく」のように発せられるところだが、1文字1文字、まるで視力検査のように読むと全て頭高型になる。例(3a)で示すように「さん」は直前のモーラが高ければ（「田中」の「か」は高い）、高く発せられ、直前のモーラが低ければ（「柴田」の「た」は低い）、低く発せられる、つまり独自のアクセントを主張しない韻律外性(extrametricality)という性質を持っている。ところが、それにもかかわらず例(3b)のように1文字の名前に付けば全体が頭高型になるのは、名前が文字の意味とは切り離されたものとして（たとえば夏という姓は暑い季節とは別物として）発せられるからである。同様のことは「くん」「ちゃん」にも当てはまる。音読みの文字だけでなく例(4)

の「定」(さだ)のような訓読みの文字も、意味(決める意)と切り離された場合はやはり頭高型である。例(5)の「しく」のように実在しない文字でも、実在しないからアクセント型がわからず発音できないというわけではなく、意味を考えなければ頭高型で発せられる。

これらの音調を「アクセント」と呼ぶ理由は、理念的なものではなく、一般に「アクセント」と呼ばれている韻律との類似という記述的なものである。これは具体的には以下3点である。第1点、これらの音調はモーラ内部でのピッチが変動せず一定という聴覚印象がある。第2点、各モーラのピッチは、当該のモーラが伸縮しても、それによって変化を受けないという聴覚印象がある。たとえば、カナ文字に馴染みのない学習者に「サダ」とカタカナを書かせている最中には(6)のように、

(6) さ——' だ一、はい、そうです。

「サダ」という文字の発音は学習者の筆記のタイミングに応じてさまざまに伸縮するが、それにかかわらず、「さ」の部分は一定の高ピッチ、「だ」の部分は一定の低ピッチに聞こえる。第3点、たとえば意味がないことが意識されつつも、文字単位ではなく、まとまった文字列単位で発話される場合、この音調は消え、代わって合成語アクセント(逆2型アクセント)らしき音調が現れる。つまり「合成語になったことで各文字のアクセントが合成された」と感じられる音調になる。たとえば次の(7)では、

(7) 箱には FVZA とランダムな記号が付いている。

「FVZA」は何ら意味がないことを話し手が承知しつつも、1文字ずつ「え' ふ」「ぶ' い」「ぜ' っと」「え' え」と発音され得るだけでなく、「えふぶいぜ' っとえ' え」とも発音され得る。

以上3点から本発表では問題の音調を「アクセント」と判断している。「アクセント」は語の音調である以上、ここで見ているのは、「語」の認定が発話モードによって変わり得るということでもある。具体的には、意味を考えずに1文字ずつ発音する場合はその1文字が1語になって独自のアクセント(頭高型アクセント)を持つということ、また意味を考えずに文字列をまとめたものとして発音する場合はそのまとまりが1つの合成語になって合成語アクセント(逆2型アクセント)

を持つということである。(なお、この頭高型アクセントと逆2型アクセントを同じものと見ることは魅力的な考えではあるが支持できない。たとえば(1)の「W(だぶりゅう)」が頭高型であって逆2型でないことを考えられたい。逆2型の合成語アクセントはアクセント合成におけるスキッピング運動(文献[3])の考えを採れば特別な仮定を設けることなく説明できる。)

### 3. 読み上げ感動詞の頭高型アクセント

いま見た文字モードのアクセントと同様のアクセントは感動詞にも観察される。感動詞が「いま・ここ・わたし」(Here-now-I)の立場から発せられるのではなく、「その時・その場・その人物」の立場から、いわば読み上げるように発せられる場合、決まって頭高型アクセントになる(文献[4][5])。本節タイトルの「読み上げ感動詞」とはこの場合の感動詞を指したものである。たとえば次の(8)のように、

- (8)a. 箱を開けたらあ'ら不思議。  
 b. 箱を開けたらお'や不思議。  
 c. 箱を開けたらま'あ大変。  
 d. 箱を開けたらな'んと中身は.....  
 e. 箱を開けたからさ'あ大変。

物語の登場人物(箱を開けた人物またはその周囲の人物)の驚きのきもちと結びつく感動詞「あら」「おや」「まあ」「なんと」「さあ」は全て頭高型アクセントで発せられる。

『上品』な発話キャラクタ(文献[6])はまるで他人事のように驚くので、「その時・その場・その人物」の立場から発せられる場合と同様、驚きの感動詞は頭高型で発せられる。たとえば(9)のいかにも上品な発話は、

- (9)a. あ'ら、田中さんじゃありませんの。  
 b. お'や、お久しぶりね。  
 c. ま'あ、大変。  
 d. な'んと、さようでしたか。

文頭の感動詞「あら」「おや」「まあ」「なんと」が全て頭高型アクセントで発せられる。これら『上品』な発話キャラクタの感動詞を除くと、「いま・ここ・わたし」の立場から発せられる驚きの感動詞は、「あら」「あれ」「おや」「えー」など、基本的に上昇調イントネーションで発せられる。驚きが平静状態から興奮状態への移

行であることからすれば、これは不自然ではないだろう。

以上、感動詞は「いま・ここ・わたし」の立場から発せられる場合はアクセントはなく専らイントネーションで発せられるが、「その時・その場・その人物」の立場から発せられる場合、頭高型アクセントを持ち、『上品』キャラの感動詞もそれに準じるということを述べた。

前節と本節で述べたことからすれば、現代日本語共通語は語のアクセントとしては頭高型をデフォルトとし、臨時に語ができたり（前節）、アクセントを持たないはずの語が臨時にアクセントを持ったりした場合（本節）、デフォルトのアクセント型が顕現するとまとめられる。

#### 4. 非述語文節のコピュラの低アクセント

名詞に直接後接するコピュラ「だ」は韻律外性(extrametricality)という特性を持ち、韻律的に独自の「主張」をせず、環境からの要請にしたがう。たとえば(10)(11)を見てみよう。

- (10)a. サ' ル  
 b. トリ  
 c. イヌ'  
 (11)a. サ' ルだ.  
 b. トリだ.  
 c. イヌ' だ.

まず、(11a)の「だ」が低アクセントなのは、語「サル」のアクセント型が(10a)に示すように頭高型で、「ル」が低アクセントだからである。また、(11b)の「だ」が高アクセントなのは、語「トリ」のアクセント型が(10b)に示すように平板型で、「リ」が高アクセントだからである。そして、(11c)の「だ」が低アクセントなのは、語「イヌ」のアクセント型が(10c)に示すように尾高型で、「ヌ」が高アクセントではあるが直後のモーラは低アクセントと指定されているからである。コピュラ「だ」だけでなく、「じゃ」や「です」の「で」といった他のコピュラ（の一部）についても、やはり同様の韻律外性が観察できる。（以下、簡単のためコピュラは「だ」で代表させる。）

ところが、コピュラが文末ではなく、非述語文節の末尾に現れる場合は、コピュラは韻律外性を持たず、常に低アクセントになる。このことを示す例を(12)に

挙げる。

- (12)a. わ、人がいっばいだなあ。  
 b. 人がだなあ、いっばいだなあ、入ってだなあ、……

平板型アクセントの語「いっばい」にコピュラ「だ」が直接後接している（そしてさらに助詞「なあ」が直後に続いている）点では(a)(b)は同じだが、(a)の「だ」は文末に、(b)の「だ」は非述語文節の末尾に位置している。そして(a)の「だ」は高アクセント、(b)の「だ」は低アクセントで発せられる。「いっばい」の場合と同じことは「偶然」「絶対」の場合にも観察できる。これら「いっばい」「偶然」「絶対」は副詞的と言うこともできる。

こうした(b)のコピュラ「だ」の低さは、(a)のように「いっばい」とコピュラが緊密に結びついて一体となっておらず、両者の間の区切れが小さなものではないため（コピュラ「だ」が「いっばい」の内容にではなく、「いっばい」という発話にメタ的に付いている、と言えよいだろうか）、コピュラ「だ」が孤立し、「環境にしたがう」韻律外性を発揮できないものと考えられる。

名詞に後接しない場合も、非述語文節の末尾に現れるコピュラは低アクセントである。例として(13)を挙げる。

- (13) そことだね、うちでだね、打ち合わせをだね、

ここでは、名詞的要素（「そこ」「うち」「打ち合わせ」）に格助詞（「と」「で」「を」）が後接して文節を構成し、それにさらにコピュラ「だ」（と間投助詞「ね」）が後接している。このコピュラ「だ」はすべて低アクセントで発せられる。このことは、一般に格助詞がアクセント核を持っており格助詞の直後でアクセントが下がると考えれば、コピュラの生起位置を取り沙汰しなくても説明できそうに見えるかもしれない。だが、たとえば「そことだけ」の格助詞「と」の直後の「だけ」や、「うちでさえ」の格助詞「で」の直後の「さ」が高アクセントで発せられることからすると、格助詞がアクセント核を持っているという仮定は記述的妥当性を欠くので、やはりコピュラの生起位置を考える必要がある。

## 5. 格助詞や動詞に直接後接するコピュラの低アクセント

非述語文節ではなく述語文節であっても、格助詞や動詞に直接後接するコピュラは低アクセントで発せられる。

次の(14)は、格助詞にコピュラが続く例である。

(14) 「一人で行くのか」「いや。社長とだ」

(14)の第2発話の第2文では、名詞「社長」に格助詞「と」が直接後接し、さらにコピュラ「だ」が直接後接している。これは前節(13)の「そことだね」などと似ており、違いはこれが非述語文節ではなく述語文節だという点だけだが、やはりコピュラ「だ」のアクセントは低である。つまり非述語文節であっても述語文節であっても、格助詞に直接後接するコピュラは低アクセントである。

次の(15)は、動詞にコピュラが続く例である。

- (15)a. 行くだ。  
 b. 行くでちゅ。  
 c. 行くざます。  
 d. 行くでござる。  
 e. 行くでおじゃる。

コピュラは動詞に直接後接しないとしばしば考えられるが、厳密には異なる。現代日本語共通語世界には、『異人』も含めたさまざまなキャラの話し手がいるからである。『田舎者』キャラの話し手はコピュラ「だ」を(a)のように「行く」に直接後接させて、低アクセントで発する。同様に、『幼児』キャラの話し手は(b)のように「行く」にコピュラ「でちゅ」あるいは「でしゅ」を直接後接させ、『上品な中年女性』キャラの話し手は(c)のように「行く」にコピュラ「ざます」を直接後接させ、『侍』キャラあるいは『忍者』キャラの話し手は(d)のように「行く」にコピュラ「でござる」を直接後接させ、『平安貴族』キャラの話し手は(e)のように「行く」にコピュラ「でおじゃる」を直接後接させる。これらのコピュラはすべて低アクセントで発せられる。

## 6. 区切れ後のコピュラと低アクセント

さらに一般化すれば、文末・非述語文節末を問わず、大きな区切れの直後の、「メタ的」なコピュラは常に低いとすることができる。このような一般化によって新

たに説明可能になる低アクセントのコピュラの例として、(16)を見られたい。

- (16)a. ちゃん行っただなんて、嘘ばかり。  
 b. あっかんべーだ。いーだ。  
 c. 「それでもう、ぐによーってなっちゃったの」「それは確かに、ぐによーだね」  
 d. この空欄に埋まる動詞は、「行く」だ。

これらのうち、引用と断定できそうなものは(a)に限られるが、引用とは言いにくい(b)(c)(d)の「だ」もメタ的ではある。定型となっている「あっかんべー」「いー」に続く「だ」だけでなく、その場で臨時に形成されたオノマトペ「ぐによー」に続く「だ」も低いように、この低さの原因は、コピュラ直前の語のアクセントよりも、コピュラの直前の区切れの深さ、コピュラのメタ性に求めるべきだろう。メタ性ゆえの切れ目の深さが音調のリセットを促し、「だ」を低くしているということである。

結局のところコピュラの韻律外性は、「述語文節において」「名詞に直接後接する」場合という、前接要素(名詞)とコピュラが極めて緊密に結びつき、区切れが浅い場合に限られる。非述語文節では名詞が名詞性を失い、副詞的になっているので区切れが深くなり(第4節)、また、もともと名詞と違ってコピュラと直接結びつきにくい格助詞や動詞(第5節)、その他(第6節)の要素にコピュラが直接後接する場合も、区切れが深くなり、コピュラは低アクセントになる。

次の(17)のような、動詞「て」形や「ながら」に続くコピュラ「だ」のアクセントが低くなるのも、直前にポーズを入れられる区切れの深さによるものではないか。

- (17)a. それも、高齢の親を置いて、だ。  
 b. スマホを見ながら、だ。

## 7. 動詞に直接後接する格助詞の低アクセント

コピュラだけでなく、格助詞も、前節要素との区切れが深いと低アクセントで発せられる。例を(17)に挙げる。

- (18)a. 行くがよい。  
 b. 当たるを幸い、……

- c. 行くに越したことは無い.
- d. 言うに事欠いて……
- e. この辞典の第3巻は「乗る」から「巻く」までだ.

格助詞は本来、名詞に直接後接するものであり、動詞に直接後接するケースは存在するものの、それは慣用句的な色彩を備えたもの(a-d)や、メタ的なもの(d)である。これらはいずれも、動詞と格助詞の結びつきが緊密ではなく、区切れが深いと考えることができる。このことを反映して、(a)の格助詞「が」、(b)の格助詞「を」、(c)(d)の格助詞「に」、(d)の格助詞「に」、(e)の格助詞「から」「まで」は低アクセントで発せられる。

格助詞とは区別されるが、「は」「も」が動詞に直接後接する際には(19)のように必ず低アクセントで発せられることも、これらが本来的には名詞に直接後接するものとして、格助詞と同様に区切れの深さから理解できるかもしれない。

- (19)a. 言うは易し, 行うは難し
- b. 行くも地獄, 行かぬも地獄.

## 8. 真偽を主張する終助詞の低アクセント

第2節に記した基準に従えばイントネーションというよりもアクセントと呼ぶべき韻律が、終助詞についても観察できる。例を次の(20)に挙げる。

- (20)a. 行くよ.
- b. 行くわ.
- c. 行くさ.
- d. 行くぞ.
- e. 行くぜ.
- f. 行くな.

行くことを相手が了解しているかどうか確認する場合、(a)の終助詞「よ」は「く」と同じ高さで、長く平坦なイントネーションで発せられる。だが、それとは違って、「行くのか行かないのか」が問題になっている局面で、行くこと（つまり命題の真性）を強く主張する場合、「よ」は低アクセントで発せられる。同様に、(b)の「わ」、(c)の「さ」、(d)の「ぞ」、(e)の「ぜ」も、強く主張する場合に低アクセントで発せられる。これらとは異なり、(f)の「な」は行くことを禁止する場合に低アクセントで発せられるが、(行かないこと、つまり

命題の偽性を) 強く主張しているということ是可以する。

## 9. まとめ

以上、本発表では、これまで語彙ごとに決まっていると考えられてきた現代日本語共通語のアクセントに、構造的に決まる部分があることを具体的な観察を通して示した。それらの観察は以下の4点にまとめられる。

第1点. そもそも、何が語であるかは、話し方によって変わる部分がある。現代日本語共通語は語のアクセントとしては頭高型をデフォルトとする。臨時に語ができたり（第2節の1文字ずつ意味を考えずに読む場合）、アクセントを持たないはずの語が臨時にアクセントを持ったりした場合（第3節の他人事の感動詞の場合）、デフォルトの頭高型のアクセント型が顕現する。

第2点. コピュラは韻律外性を持つとはかぎらず、大きな区切れの直後のメタ的なコピュラは低アクセントになる（第4節～第6節）。

第3点. 本来なら名詞に直接後接する格助詞が動詞に直接後接する場合、格助詞と直前の動詞の区切れは深く、格助詞は低アクセントになる（第7節）。

第4点. 終助詞にもその意味次第でアクセントが認められる。命題の真偽を強く主張する終助詞は低アクセントで発せられる。

## 付記

本発表は、日本学術振興会の科学研究費補助金による基盤研究(A)（課題番号：15H02605，研究代表者：定延利之）の成果を含んでいる。

## 参考文献

- [1] Sadanobu, Toshiyuki, (2015) “Four types of linguistic resources for variable speaking units in common Japanese”, *Journal of the Phonetic Society of Japan*, Vol. 19, No. 2, pp. 109-114.
- [2] Beckman, Mary E., and Janet B. Pierrehumbert., (1986) “Intonational structure in Japanese and English”, in Colin J. Ewen and John M. Anderson (eds.), *Phonology yearbook: an annual journal* 3, 255-309, Cambridge: Cambridge University Press.
- [3] 定延利之, (2000) 認知言語論, 大修館書店.
- [4] 定延利之, (2015) “感動詞と内部状態の結びつきの明確化に向けて”, 友定賢治 (編) 感動詞の言語学, pp. 3-14, ひつじ書房.
- [5] 定延利之, (2016) コミュニケーションへの言語的接近, ひつじ書房.
- [6] 定延利之, (2011) 日本語社会 のぞきキャラくり: 顔つき・カラダつき・ことばつき, 三省堂.